

稲荷山古墳外堀の陸橋部について

中山 浩彦

1 はじめに

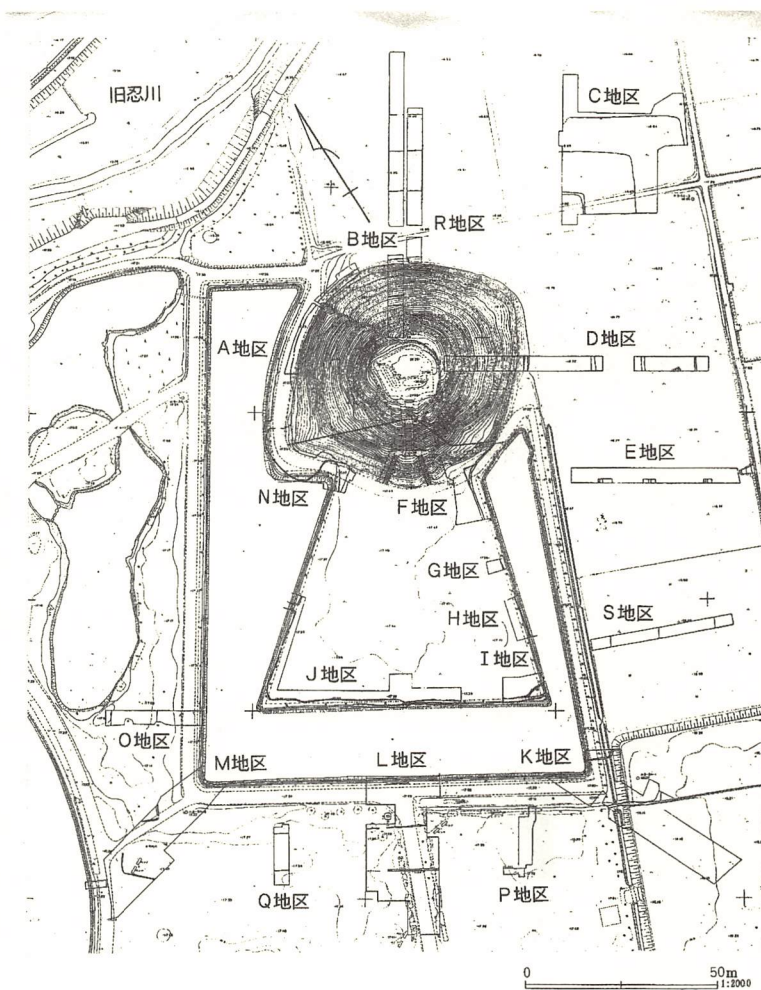
当館では、平成9年度より稲荷山古墳保存整備事業を行っており、昭和13年に削平された前方部が築造当時の姿に戻りつつある。復原整備を実施するに当たり、墳形・堀の形状を確認するため平成9年度から平成11年度の3カ年にわたって範囲確認調査を行った結果、多くの成果が得られ、その調査概要については既に報告がされている（註1）。稲荷山古墳は、昭和48年度の調査で墳丘および中堤に造出しが取り付き、中堤造出しにはブリッジがあることが確認されていた。今回報告するのは、平成11年度の調査において外堀南西コーナー部から新たに検出された陸橋部についてである。近年、各地で古墳の史跡整備が実施されるなか、古墳の周堀に従来のブリッジとは性格が異なる遺構が検出されており、稲荷山古墳の事例と併せてその性格について検討を試みたい。

2 平成11年度の調査概要

(1) M地区の調査

平成11年度の事業では、主に内堀の形状・範囲を確認するための発掘調査を実施した。調査トレンチは、墳丘の東から南にかけてのK・L・M・O・P・Q・S地区の7ヶ所と、北側のR地区の他に、造出し先端部のN地区の計9ヶ所に設定し、全体では2,280㎡の調査を実施した（第1図）。OからR地区については遺構の調査は行わず、周堀プランの検出だけを行った。全体的に遺構の残存度は悪く、K地区については攪乱のため外堀外縁プランを確認することができなかった。

新たに検出された陸橋部は、古墳の南西部に設定したM地区から検出された。同地区からは、稲荷山古墳の中堤と外堀、近世以降の溝1条、井戸跡1基が検出された（第2図）。



第1図 稲荷山古墳調査区位置図

内堀コーナーについては、昭和51年度に内堀までの整備を既実施していたことから再確認することは出来なかった。また、本トレンチ西には、丸墓山古墳と周堀が接していることから、堀が切り合うことも考えられたため補足トレンチを設定したが、稲荷山古墳周堀との重複関係は認められなかった。

中堤と外堀は、水田耕作と公園の上水道工事による攪乱が著しい上、昭和48年度の調査トレンチのため残りは良くなかった。外堀覆土は残りの良い所で厚さ30～40cmしか残っていなかったため、FA（榛名二ツ岳渋川テフラ）の確認は出来なかった。今回の調査でFAはどの調査区からも確認することが出来なかったことから、耕作等で削平されてしまった覆土上層部に堆積していた可能性が高い（第3図）。

外堀内縁コーナー部は、第1号溝と昭和48年度の第11トレンチに壊され、残存状況が悪く、立ち上がりの一部が確認できただけであった。そのため、陸橋部が屈曲部のどの位置に取り付いていたのかは不明である。

中堤は、幅約12mで、検出面の標高は約16.5mであった。

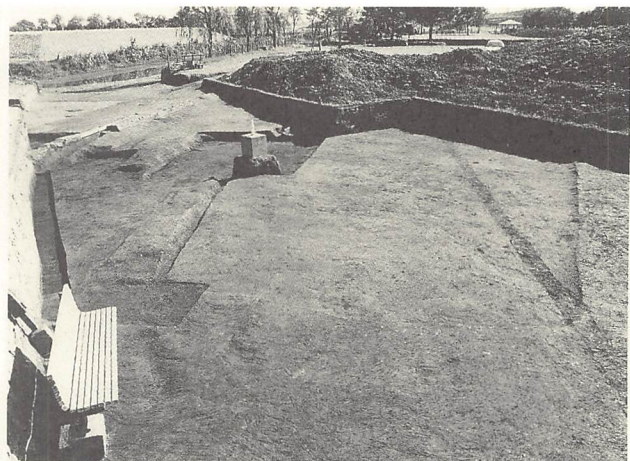
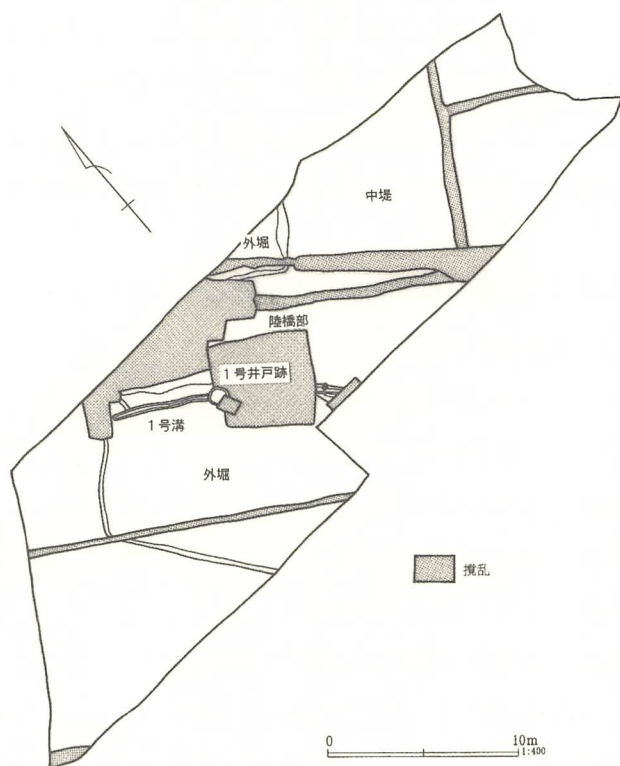


写真1 M地区完掘状況



第2図 M地区全体図

(2) 稲荷山古墳外堀の陸橋部

昭和43年に撮影された航空写真（写真2）を見ると、周囲との土質や乾燥状態の違いにより、削平された前方部や中堤、長方形に巡る二重の周堀の形状が映し出されていることが読み取れる。また、稲荷山古墳に近接して小円墳が数基存在していたことが、一枚の航空写真により判明したのである。しかし、今回検出された陸橋部部分にあたる墳丘南西部の外堀の途切れについては、他の箇所にも同様の不明瞭な部分があることから、撮影時の状況により堀が切れて写ったものと思われ、これまでは特に注意が払われることはなかった。しかし、平成11年度の確認調査により地山を掘り残した遺構が検出され、航空写真においても当該地点に周堀が切れた状態を示していたことから、本遺構は古墳に付随する施設であることが判明したのである。

外堀陸橋部は、南北幅約5m、東西幅約9mにわたり地山のローム層を掘り残した土橋状の遺構として確認された（第4図）。この陸橋部は、昭和48年度の調査トレンチに加え、近世以降の1号

溝、1号井戸跡に壊されていたことから、遺存状態は悪く、前述したように内縁コーナー部にどのように取り付いていたのかを知ることができない。しかし、航空写真から見ると、内堀が屈曲した北側部分に取り付いていたことが読み取れる。また、内縁コーナーから外縁コーナーへと斜めに取り付くのではなく、内縁コーナー部から堀の短辺にほぼ平行するような形で取り付くことがわかる。残りが悪いためはっきりとはしないが、陸橋部北側の立ち上がりは、他の堀の立ち上がりと比較して特に傾斜がきつくなることはないが、南側については立ち上がりが僅かに緩やかになっていたものと思われる。



写真2 昭和43年撮影航空写真

(3) 出土遺物

M地区外堀覆土内からは、人物埴輪頭部、器財埴輪、円筒埴輪の埴輪片が少量出土した。埴輪列につ

いては、覆土の残りが良かったK地区の埴輪の出土状態から、中堤内外の両側にあった可能性が高いが、外堀外縁部については埴輪列の存在を明確にすることは出来なかった。埴輪以外には、坏、甕などの土師器片が約40点、用途不明の土製品が5点出土した。今回の調査では、全体的に土器類の出土量が多いものではなかったが、他の調査区に比べ土師器出土量の多いのが当区の特徴である。土師器は細片が多く、現状で実測可能な遺物は出土しなかった。

用途不明の土製品は、外堀外縁コーナーの屈曲部の地点から、5点全てが一ヶ所にほぼ重なったような状態で出土した(写真3)。土製品は、堀底直上レベルより出土していることから、古墳築造段階に伴う遺物と考えられる。また、土製品が出土した近くの範囲では土師器片の出土量が他より多い傾向がみられた。

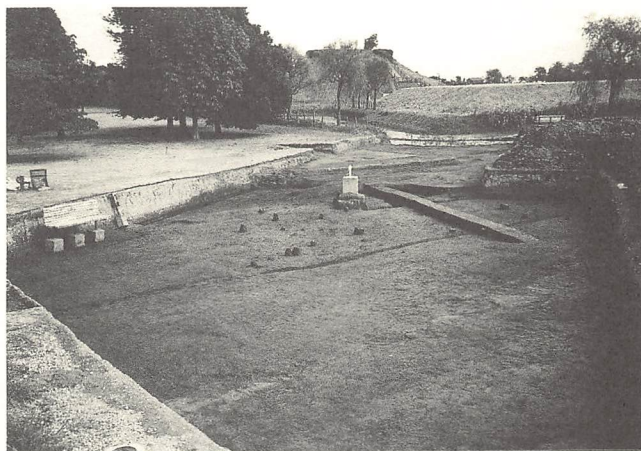
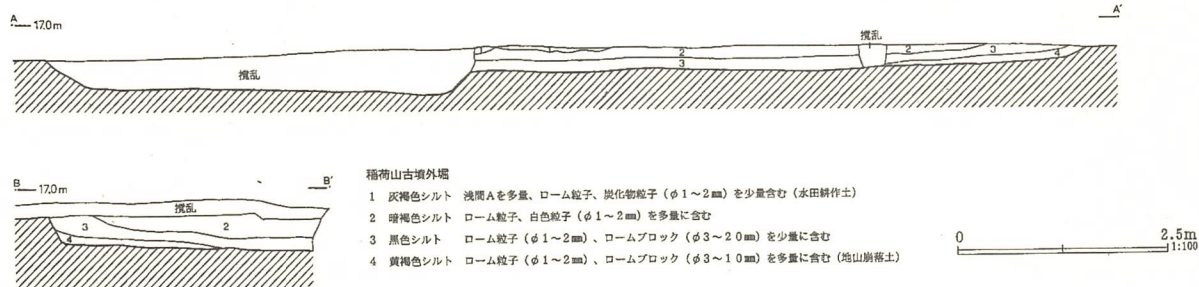
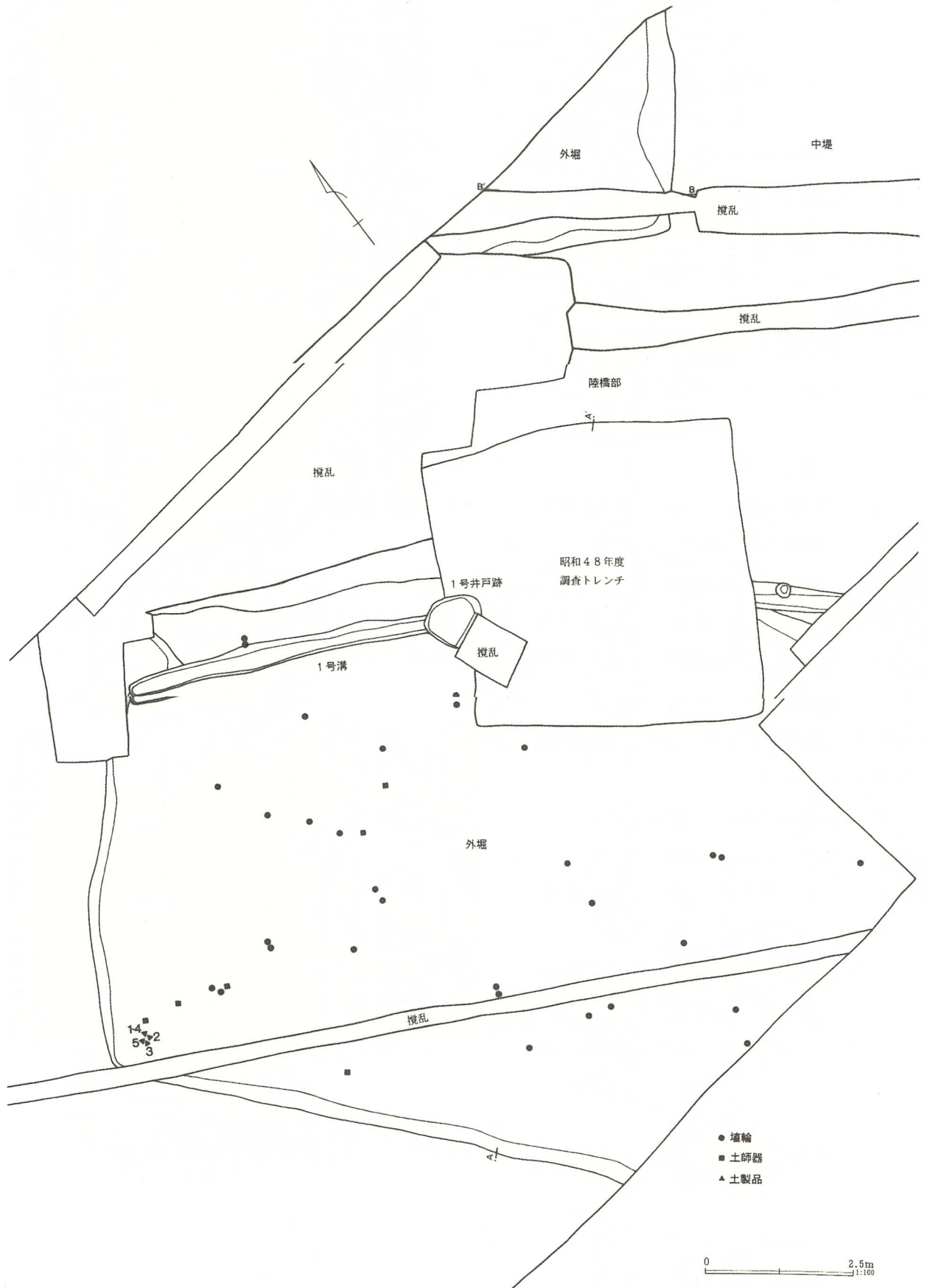


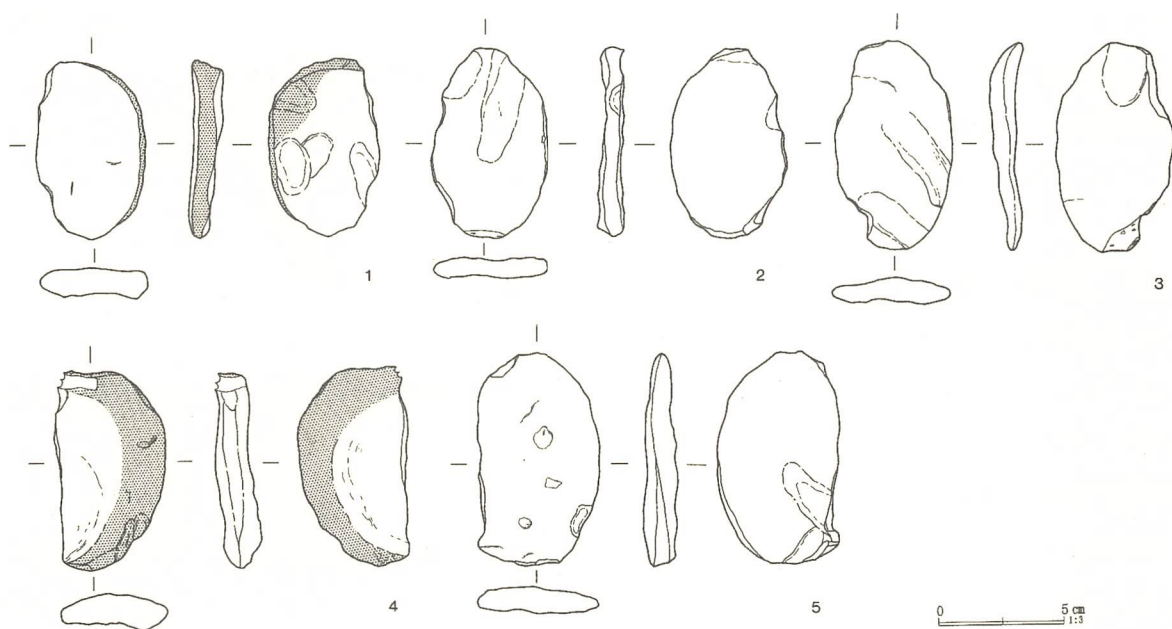
写真3 M地区遺物出土状況



第3図 M地区外堀土層断面図



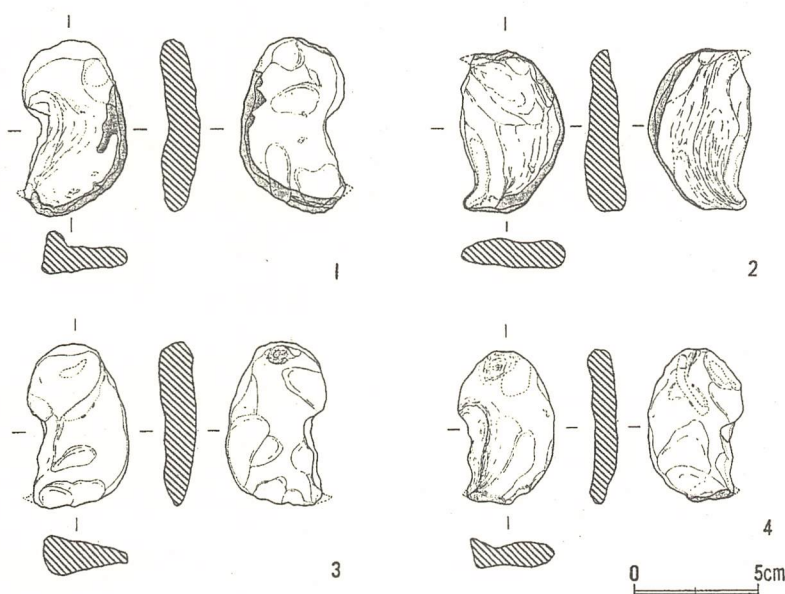
第4図 M地区外堀平面図及び遺物出土状況図



第5図 M地区出土遺物

第5図1～5は、何れも薄い板状の手捏土製品で、やや歪んだ半円形を呈している。調整は、両面とも指頭圧痕とナデによる。両面ともあまり丁寧な調整を施していないため、表裏・上下とも判別は難しい。弧を描く周縁部は、面取り状になるもの（1・2）と緩い稜を持つもの（3～5）がある。1・4には部分的に赤彩痕が認められる。2・3・5についても、摩滅が著しいため明言できないが、赤彩されていた可能性が考えられる。4から判断すると、赤彩されていない部分が未調整で、剥離した接合痕が明瞭であることから、他の土製品が貼付されていたと推測される。胎土には砂粒、小礫、赤色粒子を少量含む。焼成は良好で、色調は淡橙褐色を呈する。

1は、長さ7.0×幅4.4×厚さ0.8～1.2cmである。2は、長さ7.6cm×幅4.6cm×厚さ0.6～1.1cmで、片面に接合痕が認められる。3は、長さ8.2cm×幅4.7cm×厚さ0.5～1.1cmで、下端にくの字状の窪みをもつ。4は、長さ7.9cm×幅4.4cm×厚さ1.1～1.5cmである。5は、長さ8.4cm×幅4.8cm×厚さ0.9～1.4cmで、下端にくの字状の窪みをもつ。



第6図 昭和48年度出土土製品実測図

第6図は、昭和48年度調

査で中堤造出しの陸橋部から出土した土製品である（註2）。調査当時には神饌形埴輪とも呼ばれていたものである。中堤造出しの陸橋部からは、この土製品と一緒に人物埴輪や家形埴輪などの形象埴輪が多数出土しており、墓前祭祀を行った場所である可能性が高いとされている（註3）。この土製品は、他の製品の付属品ではないかと考えられていたが、今回出土した土製品とも比較すると、この土製品が4～5枚で一組となる単体の遺物である可能性が高い。

3 周堀に陸橋部を持つ前方後円（方）墳

（1）陸橋部を持つ主な前方後円（方）墳

以下には、史跡整備等に伴う発掘調査が実施され、周堀陸橋部の全体像をある程度把握できる前方後円（方）墳の事例をあげることにする。

埼玉県行田市瓦塚古墳（第7図左上）（註4）

稲荷山古墳の南西に位置する墳長73mで、前方部前面が剣菱形になると推測される前方後円墳である。昭和63年から平成3年度にかけて復原整備のための確認調査が実施された。墳頂部は未調査のため埋葬施設は不明であるが、出土した埴輪から6世紀前半と考えられている。

陸橋部は、外堀で2ヶ所検出された。造出し西側で検出された陸橋部は、上幅1.6～2m、下幅2.1～2.5mで、地山のロームを掘り残して作られていた。この陸橋部周辺からは、人物埴輪、家形埴輪、器財埴輪などの豊富な形象埴輪が出土し、墓前祭祀が執り行われていたことがわかった。また、前方部南の主軸からやや東寄りからも地山が掘り残された幅約2m、高さ0.4mの陸橋部が検出されている。調査の結果、西側の陸橋部と比較して不整形でもあることから、古墳築造時に外堀の掘削土を搬入するための道が、取り残されたものと考えられている（註5）。

埼玉県行田市将軍山古墳（第7図右上）（註6）

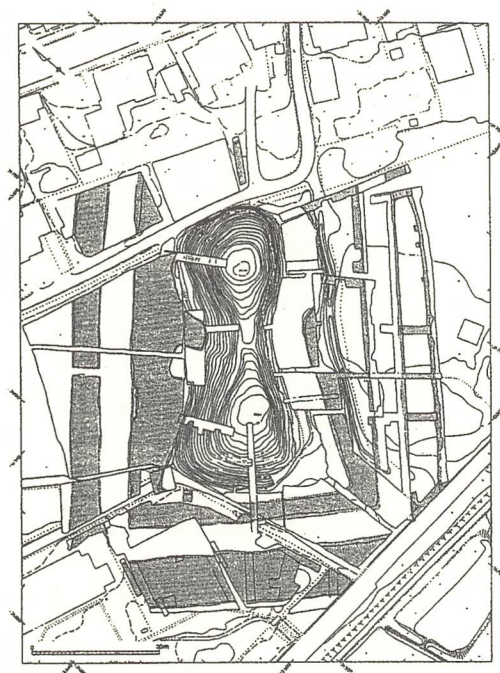
稲荷山古墳の南に位置する墳長90m、2段築成の前方後円墳である。平成3年から7年度にかけて復原整備のための確認調査が実施された。埋葬施設は、後円部から片袖型横穴式石室、前方部から木棺直葬の2基の主体部が検出された。石室内の出土遺物には、武器・武具、馬具、玉類に加え銅鏡3などがあり、築造時期は6世紀後半と考えられている。

周堀は二重の長方形を呈し、陸橋部が内堀と外堀にそれぞれ検出された。内堀陸橋部は、後円部の北から西にかけて15～20m間隔で4ヶ所検出されている。造出しの陸橋部は、造出し側に段差を持たず墳丘へ平坦に取り付いていた。また、前方部南東の中央からも陸橋部が検出されている。外堀では、後円部北側の中堤造出しのすぐ西から幅約2mの陸橋部が検出されている。

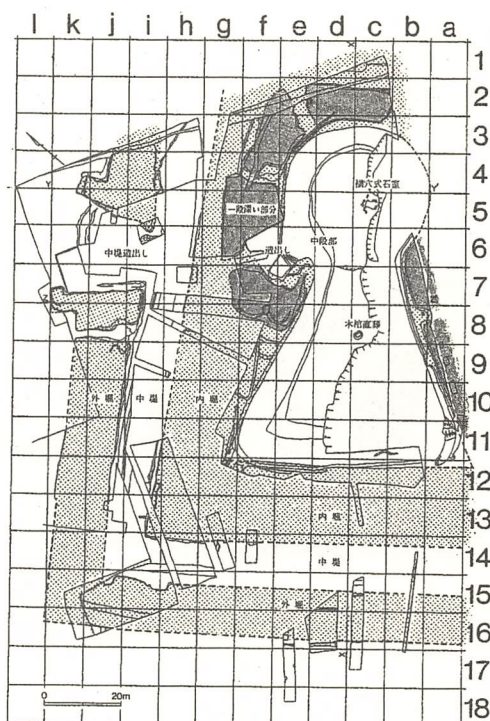
群馬県高崎市綿貫観音山古墳（第7図左下）

墳長97mで、前方部を北に向ける2段築成の前方後円墳である。埋葬施設は後円部下段に横穴式石室が構築され、獣帯鏡、金銅鈴付大帯、金銅装頭椎大刀、銀装刀子、銅水瓶、玉類など豪華な副葬品が出土した。築造時期は、6世紀後半と考えられている。

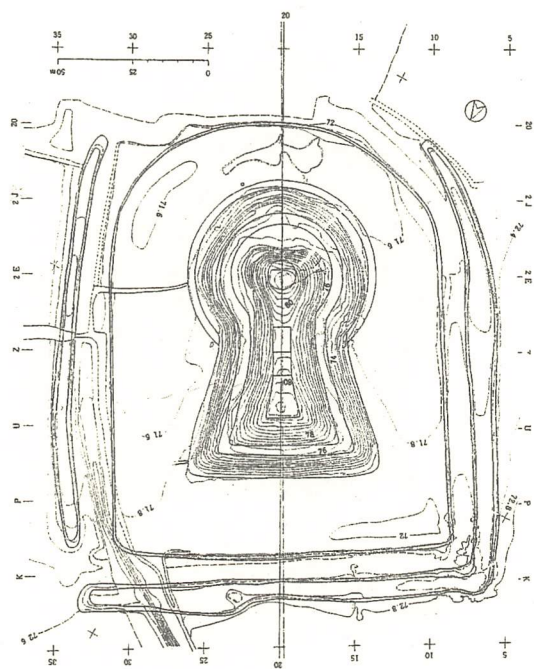
周堀は、二重の盾形を呈し、外堀に比べ内堀が広がっている。外堀は、後円部南側の約100mにわたり途切れている。昭和51年度の調査結果から、外堀北東コーナーに陸橋部が存在すると考えられていた（註7）。しかし、その後の発掘調査により、底面が浅くなりブリッジ状を呈する堀底



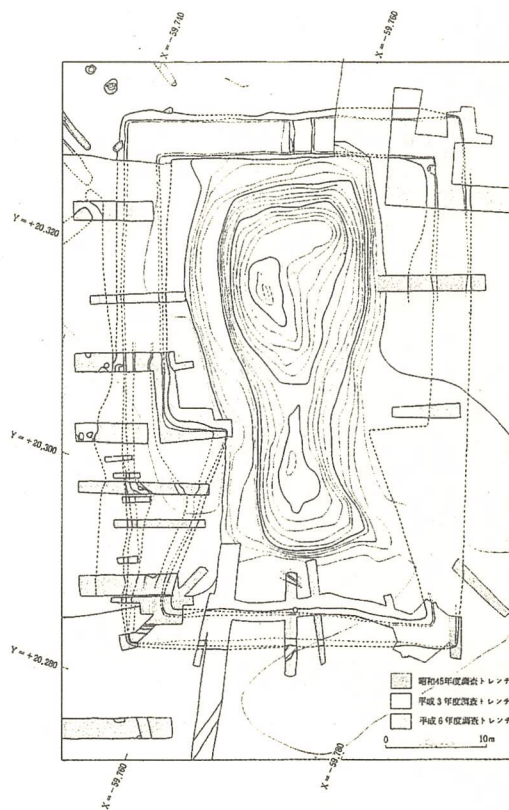
瓦塚古墳



将軍山古墳

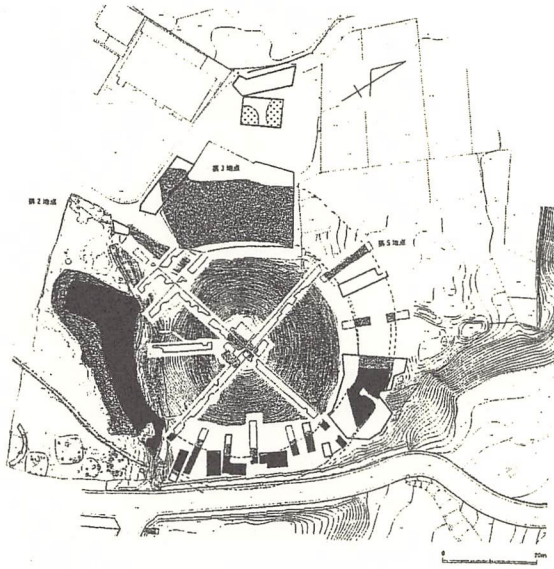


綿貫観音山古墳

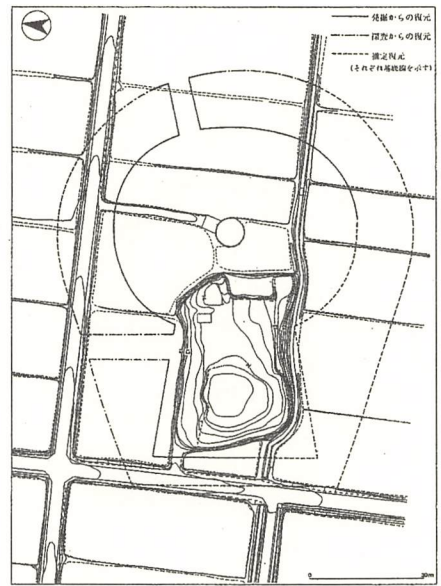


六孫王原古墳

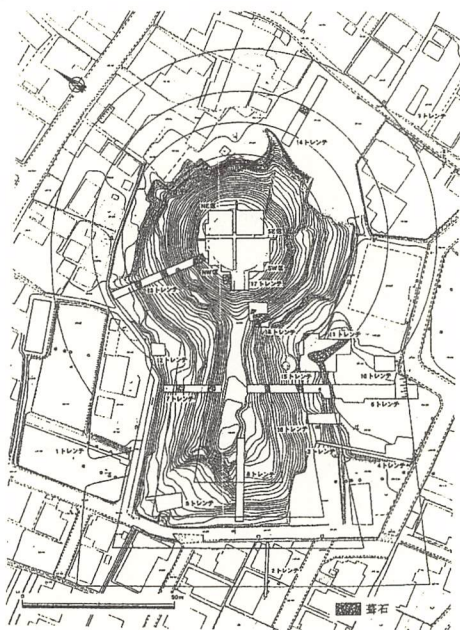
第7図 陸橋部をもつ主な前方後円(方)墳 (1)



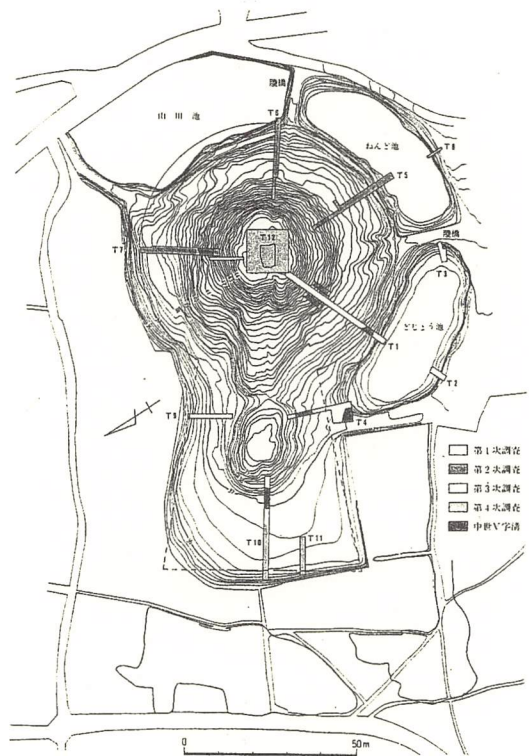
柁塚古墳



長塚古墳



昼飯大塚古墳



貝吹山古墳

第8図 陸橋部をもつ主な前方後円(方)墳(2)

が検出されたため、陸橋部の存在は否定された（註8）。8世紀代の須恵器がまとまって出土したことから、祭祀が行われていた可能性が指摘されている（註9）。

千葉県市原市六孫王原古墳（第7図右下）（註10）

姉崎古墳群中唯一の前方後方墳で、墳長は44.6mを測る。後方部の中腹にテラス状の平地があることから、2段築成の可能性がある。埋葬施設は、凝灰質砂岩截石積みの横穴式石室と推測されている。出土遺物には、金銅製馬具3、直刀1、鉄鏃などがあり、7世紀後半と考えられている。

周堀は、長辺52.5m、短辺35.0mの長方形を呈する。墳丘のほぼ主軸上にあたる後方部中央部に上幅約1.5m、下幅3.1mの陸橋部が検出されている。この陸橋部は、周堀壁中段に墳丘への取り付けがあることから、ブリッジとしての性格ではなく、築造企画にかかわる施設と考えられている（註11）。同様の陸橋部が付く前方後方墳としては、福島県原町市の桜井古墳がある（註12）。

埼玉県朝霞市柊塚古墳（第8図左上）（註13）

前方部を西に向ける墳長約66mの前方後円墳である。後円部はほぼ原形をとどめているが、前方部の大半が削平され遺存状態が悪い。後円部は、径約48m、高さが約8.5mを測る。発掘調査を実施していないため詳細は不明であるが、後円部墳頂のトレンチから、木炭槨と粘土槨と推測される2基の主体部が確認された。木炭槨の直上からは、内開きの扉を持つほぼ完形の家形埴輪と赤彩された土師器壺が出土した。これらの出土遺物から、築造時期は6世紀前半と考えられている。

周堀は古墳を全周せず、前方部の前面で途切れる形態で、幅約11mを測る。後円部周堀の墳丘主軸のやや北寄りと短軸南側から、周堀の外から内に向かうスロープが2ヶ所検出されている。埴輪の出土状況から、周堀両側に円筒埴輪列が存在していた可能性が高いと考えられている（註14）。

岐阜県大垣市長塚古墳（第8図右上）（註15）

昭和初期に粘土採掘のため後円部が削平され、前方部のみが残存している。平成2年度に範囲確認調査が実施され、その結果、墳長87mの前方後円墳であることが判明した。昭和4年の調査で、後円部から2基の竪穴式石室が検出された。東槨は、割竹形木棺を粘土で被覆した粘土槨で、西槨の詳細は不明である。出土遺物には、三角縁神獸鏡5、鋤形石、石釧、石製合子、玉類などがあり、時期は4世紀末と考えられている。

周堀は盾形を呈し、後円部の主軸からやや北寄りの部分とくびれ部北側の2ヶ所から陸橋部が検出されている。後円部側の陸橋部は、上幅約3m、下幅5.6mで、高さが0.4mであった。壁面に葺石を伴うが、周堀壁面には施されていなかった。くびれ部側の陸橋部は、上幅約4m、下幅約6.4m、高さが0.5mであった。壁面の幅1.3mに葺石を伴い、また、テラス部には5cm前後の小礫がバラス状に敷かれていた。これらの陸橋部は、周堀を掘削した後に盛土したものではなく、墳丘築造当初から計画的に地山を掘り残して配置されたものであることが調査で判明している。

岐阜県大垣市昼飯大塚古墳（第8図左下）（註16）

墳長約150m、3段築成の前方後円墳である。埋葬施設は、同一墓壙内から主軸に平行して竪穴式石室と粘土槨の2基が検出された。石室の盗掘坑からは、滑石製石釧、滑石製模造品、玉類、鉄製品などが出土した。築造時期は、4世紀後半と考えられている。

周堀は、幅15～27mで、墳丘相似形を呈する。ボーリング調査等の結果から、前方部北側の中央

部に、長さ約16m、幅約9mの陸橋部が存在する可能性が高いと指摘されている。

大阪府吹田市貝吹山古墳（第8図右下）（註17）

久米田古墳群に属する前方後円墳で、墳長は約130mである。墳丘は、16世紀頃に陣城として大きく削平されているため遺存状態が悪いが、後円部3段築成の、葺石を伴う古墳である。埋葬施設は、刳拔式石棺を納めた竪穴式石槨が検出された。盗掘にあっているため、遺物は銅鏡、碧玉製腕飾類、銅鏃、小札などの断片が出土しただけである。時期は、4世紀後半と考えられている。

周堀は、江戸時代以降にため池として利用されていたため一部改変されている。発掘調査の結果、後円部の東と西に現存する2ヶ所の陸橋部は、古墳築造時のもので、地山を削り出して作られていることが判明している。

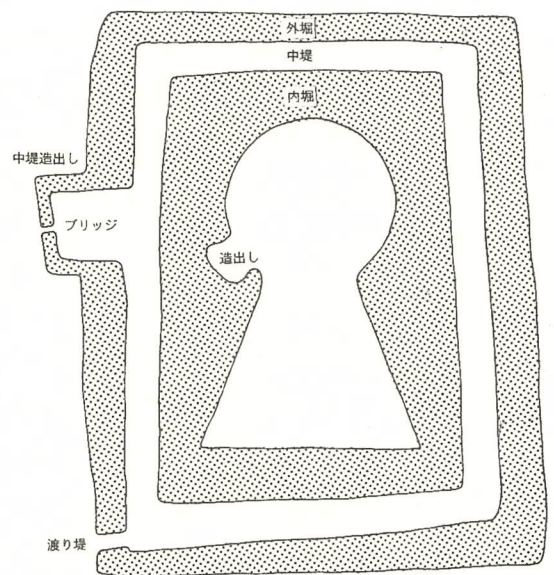
（2）前方後円（方）墳の陸橋部（註18）について

古墳の外部施設の一つである周濠、周堀（註19）については、畿内の陵墓指定古墳などの大型古墳を中心に機能、性格について論じられている。白石太一郎は、「構築当初から農業用水としての役割りを果たしていたとは考え難い」とし、「灌漑王的性格を象徴するものであり」、「首長が豊かな水を保障するための呪的な機能をもつものであった」としている（註20）。一瀬和夫は、周濠の変遷を9段階に設定し、その出現から消失期までを考察している。その中で周濠の性格を「灌漑のための水を貯めたのではなく、隔絶・隔離のための呪的行為であった」としている（註21）。両者の見解では、古墳の周濠は従来言われてきた灌漑用としての機能ではなく、呪的なものであったということと一致をみている。

しかし、古墳の陸橋部については、堰堤、ブリッジ、土橋、渡り堤、渡り土手などのさまざまな名称で呼ばれてきており、近年その調査事例が増えているにも関わらず、その機能、性格を踏まえた議論が活発に行われてきたことがなかった。日本考古学事典（註22）で「ブリッジ」の項を引くと、「墳丘と濠の外とを結ぶいわゆる渡り土手も陸橋・土橋・ブリッジなどと呼ぶことがある。」とあり、古墳のどの部分に取り付くのか、墓前祭祀との関わり等の配置・機能・性格についてあまり考慮されてはならず、調査担当者により各々の名称で報告されている状況がわかる。小円墳に関しては、白井久美子が全国のブリッジ付き円墳を集成し、配置・規模等から考察を加え、「埴輪、土器類を用いた葬送儀礼に係る行為の場」として「祭祀の道」として意味づけた（註23）。

そこで本節では、陸橋部の機能、性格等について若干の整理を試みたい。

- 1 畿内の大型古墳に見られる計画的に水を湛えた周濠に数ヶ所の陸橋部をもち、その配置に規則性は認められない。
- 2 形象埴輪や土器が多数出土し、墓前祭祀等の何らかの祭祀行為が行われた区域で、



第9図 稲荷山古墳模式図

造出しに取り付くものや、造出しを意識して計画的に配置される。また、群を構成する集団墓の中ではある程度の規則性が認められる。

3 被葬者埋葬における通路で、埋葬施設が設置される後円（方）部に取り付く。

4 古墳築造における堀を掘削し、盛土を墳丘に運搬するために設けられた作業用の仮設通路で、そのまま掘削されず掘り残されたもので、その配置には規則性が認められない。

1は、奈良県天理市行燈山古墳、同渋谷向山古墳などが挙げられる。2は、瓦塚古墳外堀西側の陸橋部で、従来から言われている「ブリッジ」である。3については、確証が困難であることから判別が難しいが、六孫王原古墳、長塚古墳後円部の陸橋部が相当すると推測できる。4は、稲荷山古墳南西の陸橋部、瓦塚古墳外堀南側の陸橋部、將軍山古墳内堀の陸橋部、綿貫観音山の例が挙げられる。現時点でそれぞれの呼称は、1が「堰堤」、3が「土橋」、4については「渡り土手・渡り堤」が相応しいのではないかと考える。今回例示した陸橋部の中でも、その性格・機能について不明な点が多い。今後、陸橋部の類例の増加や、調査による詳細な遺物出土状況の検証等によりそれぞれの細分が可能になると考える。

4 おわりに

今まで古墳の調査といえば、埋葬施設のある墳丘本体の発掘調査が主体に行われてきた。稲荷山古墳の整備事業を通して感じたことは、今後も史跡整備等で多数の古墳の発掘調査が実施されると思うが、墳丘の外部施設である造出し、周堀（濠）なども加えた総合的な調査を実施すべきであるとする。そうすれば、今回は言及できなかったが、古墳の正面観、築造企画、築造方法、選地、墓前祭祀などの疑問を解決する糸口となるのではないだろうか。

なお、今回の概要報告で提示した遺構・遺物などの数値等は、平成17年度刊行予定の調査報告書をもって代えさせていただきたい。

註

1 宮昌之 1998 「《資料紹介》稲荷山古墳出土の須恵器－平成9年度発掘資料－」『調査研究報告』第11号 埼玉県立さきたま資料館

西口正純 2000 「稲荷山古墳確認調査の概要－平成9・10年度－」『調査研究報告』第13号 埼玉県立さきたま資料館

西口正純 2001 「稲荷山古墳保存整備事業－平成11年度 確認調査の概要と復原設計－」『調査研究報告』第14号 埼玉県立さきたま資料館

2 斎藤忠・柳田敏司ほか 1980 『埼玉稲荷山古墳』 埼玉県教育委員会

3 栗原文蔵・田部井功 1974 「稲荷山古墳・丸墓山古墳周堀発掘調査概要」『資料館報』No. 5 埼玉県立さきたま資料館

4 杉崎茂樹ほか 1986 『瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第四集 埼玉県教育委員会

若松良一ほか 1989 『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第七集 埼玉県教育委員会

若松良一ほか 1992 『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第八集 埼玉県

教育委員会

- 5 若松良一ほか 1992 『二子山古墳・瓦塚古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第八集 埼玉県教育委員会
- 6 岡本健一 1997 『将軍山古墳』 埼玉県教育委員会
- 7 群馬県教育委員会 1982 『史跡 観音山古墳－保存修理事業報告書－』
- 8 金子智一ほか 1985 『綿貫遺跡』高崎市文化財調査報告書第47集 高崎市教育委員会
大塚初重・梅沢重昭ほか 1998 『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第242集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 9 金子智一ほか 1985 『綿貫遺跡』高崎市文化財調査報告書第47集 高崎市教育委員会
- 10 中村恵次・沼沢豊・田中新史 1975 『古墳時代研究Ⅱ－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－』 古墳時代研究会
半田堅三 1997 『姉崎六孫王原遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集 財団法人市原市文化財センター
- 11 市毛勲 1999 「市指定 六孫王原古墳について」『市原地方史研究』第19号 市原市教育委員会
- 12 原町市教育委員会 1998 『桜井古墳保存整備計画書』
- 13 照林敏郎 2001 『宮台遺跡第5・6地点発掘調査報告書－柊塚古墳確認調査報告書－』朝霞市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 朝霞市教育委員会
朝霞市教育委員会 2002 「遺跡が語る古代の朝霞」6 (現地説明会資料)
- 14 齋藤欣延氏のご教示による。
- 15 中井正幸ほか 1993 『長塚古墳－範囲確認調査報告書－』大垣市埋蔵文化財調査報告書第3集 大垣市教育委員会
- 16 中井正幸ほか 1996～1999『昼飯大塚古墳Ⅰ～Ⅴ 範囲確認調査概要』大垣市教育委員会
大垣市教育委員会 1999「昼飯大塚古墳 第7次発掘調査 現地説明会資料」
- 17 吉井秀夫 1999 『久米田貝吹山古墳－第1～4次調査概報－』岸和田市文化財調査概要25 岸和田市教育委員会
- 18 本稿では、古墳に取り付く地山掘り残しの遺構を総称して陸橋部と呼ぶことにした。
- 19 従来よばれてきた呼称を踏襲し、「周濠」は古墳築造時から計画的に周囲に水を湛えたもの、「周堀」を古墳築造時には空堀であったもの、と定義する。
- 20 白石太一郎 1983 「古墳の周濠」『角田文衛博士古希記念 古代学叢論』平安博物館研究部
- 21 一瀬和夫 1992 「3-1 周濠」『古墳時代の研究』第7巻 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造 雄山閣
- 22 田中琢・佐原真 2002 『日本考古学事典』三省堂
- 23 白井久美子 1983 「小規模古墳の一類型について－ブリッジ付き円墳の検討－」『古代』75・76合併号 早稲田大学考古学会